

## 自治体子ども虐待死亡検事例証報告書からみた子ども虐待援助過程の構造 - 危機理論とソーシャルサポート論を援用して -

武井恒美<sup>1)</sup>、丸田秋男<sup>1)</sup>、春木邦子<sup>2)</sup>、鈴木昭<sup>1)</sup>

1) 新潟医療福祉大学 社会福祉学科

2) 聖籠町教育委員会

【背景・目的】自治体死亡事例等検証報告書には、子ども虐待の再発防止と子ども虐待のないまちづくりの方向を指し示す多くのエビデンスが集積されている。依然として増加し続けている子ども虐待の発生を減少に転じ、子ども家庭福祉を取り巻く環境の好転を図るには、不幸にして検証作業を実施しなければならなかったこれらの報告書を活用していくことが求められている。

子ども虐待は、孤立した状況のなかで要支援要素を抱えたまま適時適切な支援対応がないと拡大深刻化する。このことから本研究は、危機理論とソーシャルサポート論を援用し、自治体死亡事例等検証報告書をもとに子ども虐待援助過程の構造と支援機能を明らかにし、人々の孤立解消と地域における子ども虐待への支援対応力を高め、子ども虐待の増加に歯止めをかけることを目的とする。

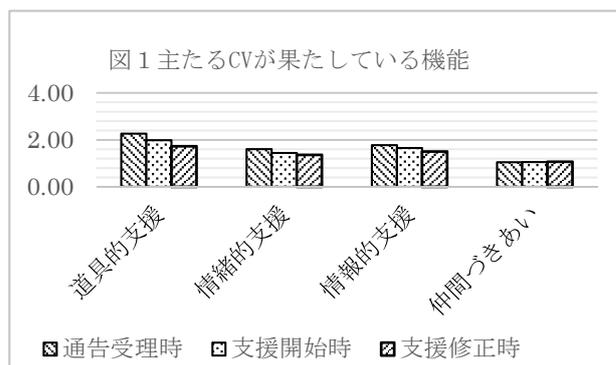
【方法】子ども虐待の通告時から死亡等重大な事態に至るまでの過程には、危機理論に基づいて重大な事態な事態を回避する支援介入の時機があると考え、この時機に Kahn and Antonucci によるコンボイ（以下CV）がその役割、機能をどの程度果たしているかを①通告時、②具体的な支援開始時、③支援方法の見直しの3時機に上記報告書131事例について評定した。CVは配偶者を1次CV、友人・近隣等を2次CV、専門家・専門機関を3次CVに類型化し、①から③のそれぞれの時機に1次、2次、3次コンボイが、ソーシャルサポートの役割を「果たしている5」から「果たしていない1」までの5段階で評定し、さらにそれぞれの時機における最所得点のものを主たるコンボイとして、その果たしているサポート機能（道具的支援、情緒的支持、情報支援、仲間づきあい支援）ごとに評定した。

【倫理的配慮】新潟医療福祉大学倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号17718-160801）。

### 【結果】

	通告受理時	支援開始時	対応修正時
1次CVの役割	1.52	1.44	1.34
2次CVの役割	1.76	1.67	1.51
3次CVの役割	2.43	2.18	1.98

CVの果たしているサポートの程度は、いずれの時機においても配偶者、近隣、専門家・機関の順に低く、さらに事態が進行するにつれそれぞれの果たすサポート機能は低下していくことが明らかになった（表1）。また、虐待の態様別に各CVの支援の程度を見ていくと、3次CVにおいて通告受理時、支援対応の修正時において他CVとの間に差が見られた。3次CVが他CVに比して高得点であったことから3次CVを主たるCVとしその果たしている機能をみていくと、仲間づきあいの支援を除き情緒的機能が道具的、情動的機能より下回り、いずれの機能も援助過程が進行するにつれて低くなる傾向がみられた（図1）。



【考察】援助過程において3次CVが専門家・機関として役割、機能を発揮していると考えられるが、サポートの内容は、情緒的支援が他の機能を下回り、援助が進行するにつれ、果たす役割・機能が低下していった。このことは、職員の専門性を高める必要性の指摘につながるが、加えて被支援者との関係悪化に直面しながら援助を展開していかなければならない子ども虐待対応の困難さを示していると考えられる。仲間づきあいの支援は、当事者活動として家族の再統合も視野に入れた今後の展開が課題である。

【結論】ソーシャルサポートが届かずあるいはこれを拒否して死亡した子どもや被支援者家族の置かれている過酷な状況を眼前にして、CVにまず求められるのは、指導の前の情緒的支持機能を発揮することである。

【謝辞】本研究は、「子ども虐待防止に有効な施策と支援は何か—社会指標と自治体死亡検証の分析から—」（平成28年度～30年度科学研究費基盤C 課題番号16K04207）の一部である。